様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：８３６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３１２０

研究課題名（和文）近世信州伊那地域における村社会の構造

研究課題名（英文）The structure of village society in Shinshu Ina area in the early modern period

研究代表者
羽田　真也（Hada, Shinya）

飯田市歴史研究所・研究部・研究員

研究者番号：４０７５７８３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世の村社会に生きた人々が生活を成り立たせるためにどのような社会秩序を成り立たせていたのかという視角から、信州伊那郡座光寺村を素材に、とくに村の内部構造や都市との関係に着目して、その社会構造を明らかにした。また、同じ伊那地域に山里などとの比較検討を通して、信州伊那地域の村社会の特性を考察した。こうした研究を進めるにあたっては、座光寺の住民と連携し、現在のまちづくり運動の進展に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
各家の存立を支える共同組織のあり方、村内の如来寺の出開帳を通した都市との関係、山林の用益秩序などの分析を通して、座光寺村の社会構造を明らかにできた。これらにより、地縁と同族関係の絡み合いの中で村の共同性が実現されていた点など、これまで十分に検討されてこなかった、信州伊那地域における近世中後期の村社会の特性を把握するための足掛かりを得ることができた。また、可能な限り、座光寺の住民と協働して研究を進めたことにより、歴史文化を基盤としたまちづくり運動に研究成果を反映させることができた。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify the structure of the village society in the early modern period, I focused on the people lived in Zakoji village in Shinshu Ina county how they established the social order to make their living affluent. I elucidated the social structures in Zakoji village especially focusing on the internal village structure and the relationship with the urban city. I also considered the characteristics of the village society in Shinshu Ina area through a comparative study with mountainous communities in the same area. These studies contributed the progress of the current community development movement in collaboration with the residents of Zakoji village.

研究分野：日本近世史

キーワード：村社会　地域社会　社会構造　信濃国（信州）　伊那地域

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究を構想した背景には、以下の 3 点の問題意識があった。

（１）村社会の現在

日本近世に存在した約 63,000 の村は、生産や労働、生活、信仰や文化の諸側面を包含する、そこで暮らす人びとにとって不可欠な共同体であった。また、そのあり方は、地理的・社会的条件の違いにより多分に地域性を有した。こうした村社会は現在まで根強く持続する一方で、グローバル化の中で急速に解体しつつある。地域の将来を展望するうえで、村社会の歴史的実態をそれぞれの地域に即して精緻に明らかにすることは喫緊の課題といえる。

（２）日本近世村社会研究の進展

1990 年代半ば以降、社会的権力論などを契機として、近世村社会研究は大きな進展をみせた（吉田伸之「社会的権力論ノート」久留島浩・吉田伸之編『近世の社会的権力』山川出版社、1996 年など）。それは、村や地域それぞれの社会構造の固有性に絶対的な意義を見出し、その精緻な把握を求めるものであった。これにより、各地の村や地域の内部構造を意識した研究が進むことになったが（町田哲『近世和泉の地域社会構造』山川出版社、2004 年など）、ひとつの村に即して、生産や労働、生活、信仰や文化に関わる個々の要素の分析と、その複合関係を読み解き、徹底してその全体構造に迫ろうとする研究は少ない。

（３）信州伊那地域の村社会研究

信州伊那地域については、古島敏雄氏の御館一被官制度、中馬、山の用益秩序に関する先駆的な研究（『古島敏雄著作集』全 10 巻、東京大学出版会、1974～83 年）をはじめとして豊かな蓄積がある。これらの成果を継承しつつ、また（２）の研究動向もうけて、近年では、城下町飯田との関係や山の用益に重点を置いて上飯田村の社会構造を明らかにした研究（飯田市歴史研究所編『飯田・上飯田の歴史』上巻、2012 年）や、深い山間で厖大な森林資源と一体的に存在する清内路村の共同研究（後藤雅知・吉田伸之編『山里の社会史』山川出版社、2010 年など）などが生み出されている。これらの成果は重要であるが、一方でこの地域にはこうした山里とは様相を異にする、天竜川の河岸段丘上に展開し、稲作を主とする村も存在した。このような村の社会構造も明らかにし、山里研究を中心に進む当該地域の村社会研究をさらに深化させる必要がある。

２．研究の目的

（１）信州伊那郡座光寺村（現・飯田市座光寺）の社会構造の解明

座光寺村を素材に、近世の村に生きた人びとが生活を成り立たせるためにどのような社会秩序を構築したのかという視点から、村社会の全体構造を実証的に解明する。

（２）信州伊那地域の村社会の特性把握

（１）の分析を踏まえ、同じ伊那地域にある山里社会との比較検討、あるいは他地域の村社会との比較検討を行い、座光寺村の社会構造の固有性とともに、伊那地域の村社会にみられる共通の特性を明らかにする。

（３）地元・座光寺と協働した史料調査・保存活動、研究成果の還元

座光寺では、有志による「歴史に学び地域をたずねる会」が、地域に残る史料の保存や歴史遺産の活用に関わる活動を進めている。これと密接に連携し、史料の存在意義を喚起するとともに、歴史文化を基盤としたまちづくり運動の進展に寄与する。

３．研究の方法

（１）村社会は、気候・地形・地質といった自然環境、集落・耕地・水路・山林といった人為的に形成された空間、村役人集団・祭祀を担う集団・職人や商人の営業に関わる集団といった社会集団、小百姓や豪農の家、こうした多様な要素で構成されていた。それぞれの要素は人びとの生活の一端を示すものであり、その全体像を明らかにするためには、要素ひとつひとつの丁寧な分析と複合関係の把握が必要となる。そうした方法に基づいて、周辺村むらや城下町飯田、飯田藩など外部との関係も視野に入れながら、座光寺村に即し村社会の全体構造を具体的に描き出す。そのうえで、同じ伊那地域の山里社会などとの比較から信州伊那地域の村社会の特性を浮き彫りにする。

（２）上記の分析を可能とするためも、座光寺に残る史料群の現状記録調査に取り組む。古瀬今村家文書、座光寺支所文書、今牧新治家文書（並木今牧家文書）の 3 つの史料群を基軸に、その他の史料群の調査も行う。周辺地域に残る関係史料の収集も進める。

（３）現状記録調査を「歴史に学び地域をたずねる会」と協働して行う。また、研究成果は、論

文などで公表するのみならず、座光寺にて報告会を随時開催し、地域市民へ還元する。さらに、研究期間中の成果を総括するため、最終年度に、伊那地域の山里を研究する研究者、もしくは他地域の村社会を研究する研究者を招聘し、地域市民の参加も得て、ワークショップを開催する。

４．研究成果

（１）史料調査

本研究の対象地である座光寺においては、以下の史料調査を実施した。

① 今牧新治家文書（並木今牧家文書）：近世前期から座光寺村の肝煎・庄屋を務めた家の史料群。近世～明治期の史料で構成されている。現状記録調査を完了させ（約 230 点）、調査報告と目録を公表した（羽田真也「飯田市座光寺今牧新治家文書調査報告」『飯田市歴史研究所年報』15 号、2017 年、203－20 頁）。

② 古瀬今村家文書：近世中期から座光寺村の庄屋を務めた家の史料群。近世中期～現代の史料で構成されている。現状記録調査を実施し、約 3,800 点の目録を作成するとともに、保存措置を講じた。同時に、写真撮影も進めた。調査は現在も継続中である。

③ 座光寺支所文書：近世の村方史料に関して、「歴史に学び地域をたずねる会」とともに再整理作業に取り組み、あわせて写真撮影も行った。

④ 古市場上沼博人家文書：近世に寺小屋を開いた家の史料群。近世～昭和期の史料で構成されている。「歴史に学び地域をたずねる会」とともに現状記録調査に取り組み、約 80 点の目録を作成し、同時に保存措置を講じた。また、写真撮影も進めた。

以上のほか、近隣地域に残る旧大島村役場文書、上新井古文書（以上、松川町資料館所蔵）、関川家文書、木村家文書、岡田宗夫氏文書（以上、高森町歴史民俗資料館所蔵）、吉田区有文書（高森町吉田区所蔵）、旧川路村役場文書、今村家（辻）文書（以上、飯田市川路自治振興センター所蔵）、桜井源八家文書（阿智村清内路清中プラザ保管）などの調査（主に写真撮影）を行った。これらの史料調査が、以下の研究成果に結びついた。

（２）座光寺村内部の社会構造

村高 2000 石余、家数約 300 軒を有する巨村・座光寺村に暮らす人びとが、どのような共同関係を構築していたのかという視点から、村内の「組」（社会集団）に着目し、その性格と機能について検討した（羽田真也「近世座光寺村の組と家」『飯田市歴史研究所年報』18 号、2020 年、86－103 頁）。

幕末期の座光寺村では、300 軒近い家屋敷が、集落と呼びうるような凝集性をもたず、道に沿って村全体に広がっていた。これらの家々は、当時 20 余りあった組のいずれかに属していたが、その組は地縁と同族関係が絡みあう形で成立していた。すなわち、地縁的な結合を基軸とする一方で、別家は他地区に居住しても本家と同じ組に属したため、A組のなかにB組やC組の屋敷が展開する、D組の屋敷とE組の屋敷が混在する、といった状況が生み出されることになった。

座光寺村の小百姓の家は多様な金融関係をとり結んで存立していたが、比較的多額の借金を行う場合には組が請人にたった。また、こうした家が借金や滞金により立ち行かなくなった際には、所持地や家財の処分、返済計画の立案、金主への交渉、返済金の立替や工面などに組が全面的に関与し、家の経営の建て直しを図った。さらに組は、組の者が村外で死亡した際の経緯の確認、組の者の葬儀の差配、組の者が家作を行う際の隣地との調整、藩からの触の下達、上草の納入や人足の徴発なども担った。これらのことからは、組が村の支配や運営の単位であると同時に、各家の存立を支えるもっとも基礎的な共同組織であったことがうかがえる。しかし一方で、組内において特定の同族集団とその他の家が対立するというように、組の地縁的集団の側面と同族集団の側面とがせめぎあい、場合によっては組の分裂に至ることもあった。

伊那地域の村社会研究、とくに近世中期以降を対象とした研究において、本研究のように共同性のあり方という観点から社会構造を明らかにしようとしたものは、管見の限り見当たらない。その点で、地縁と同族関係とが絡みあう共同性のありようを明らかにした本研究は、一定の意義をもつといえる。

（３）座光寺村の村社会と都市との関係

座光寺村の如来寺（天台宗、現・元善光寺）が文政 5（1822）年に京都の誓願寺（浄土宗西山深草派本山）で行った出開帳を取り上げ、都市社会との関係について検討した（羽田真也「出開帳を請け負う人々　―信州伊那郡座光寺村如来寺の事例から―」塚田孝・町田哲・三田智子編『三都科研報告書　日本近世の都市社会と史料』2020 年、162－172 頁）。

この出開帳では、誓願寺のみならず、往復路の三河吉田・岡崎、美濃赤坂、近江醒井・柏原・彦根・草津などでも開帳が催行された。これらは、出開帳を求める如来寺と、その受け入れを望む誓願寺など出開帳先との意向が合致し、さらに幕府寺社奉行所や本山、あるいは京都町奉行所や各地の藩役所への諸届を含む、さまざまな準備や調整を経て実現されたが、そこには多様な人物や集団が関与した。如来寺側の人物としては、寺役人の窪田伝右衛門・池田兵左衛門・石川喜平次、役僧の清浄光院などの名前が挙げられる。

このうち、誓願寺との交渉を担うなど、出開帳全体を取り仕切った窪田伝右衛門は、飯田城下の本町二丁目の者で、同城下荒町にあった、伊那郡の幕領 11 ヵ村を預かる千村平右衛門の役所（荒町役所）に出入りする郷宿であった。また、出開帳に先立って上京し、諸道具を整える役割

などを果たした池田兵左衛門は、飯田城下伝馬町の者であった。寺役人は飯田城下町など座光寺村や如来寺近辺に居住する、他に生業をもつ者たちであり、そこで獲得した知識や経験を活かして出開帳に携わったといえる。一方、京都町奉行所への出願などを務めた清浄光院は、金 30 両もの高額で如来寺に雇用された、座光寺村や飯田に所縁のない者であった。彼は公家（羽林家）の清水谷家とつながりをもち、このような京都における人脈や他の開帳に関わった経験などに基づいて如来寺の出開帳に携わったと考えられるが、必ずしも如来寺の意志に従わず、場合によっては簡単に欠落してしまう可能性のある者であった。如来寺の出開帳は、こうした座光寺村や如来寺の外部に存在する請負人たちによって実現されていたのである。

出開帳の研究にはかなりの蓄積があるが、その実現過程やそれに関わる人びとを丁寧に描き出したものは少ない。とりわけ実態が不明な中小の寺社が行う出開帳の具体像を明らかにした点に、本研究の意義が見出せる。

（４）山林の用益秩序

伊那地域の山林の用益秩序に関しては、すでに古島敏雄氏や多和田雅保氏などの先行研究がある。そこでは、地元・入会・入方・地付入会といった入会権、さらには田地付・村付・地付といった用益権の内容をめぐり検討が行われているが、後者についてはいまだ共通理解が成立していない。本研究では、この点を念頭に、座光寺村に隣接する市田郷の山における 17 世紀の山論を取り上げ、山林用益のあり方を分析した。新たな理解を提示するには至らなかったものの、地元が材木を伐り出す権利とも結びついていることなどを明らかにした。

（５）座光寺村の全体構造と信州伊那地域の村社会の特性

①座光寺村の全体構造把握

残念ながら、研究期間中に座光寺村の全体構造を描き出すまでには到達しなかった。農業や水利のあり方、商人・職人の仲間や若者組といった諸集団の実態などが課題として残されている。（１）～（４）の成果を踏まえつつ、これらの検討を進めたうえで、ひとつの家においてこうした諸要素がどう絡み合うのかという視点から、その複合関係を解き明かすことで、全体構造に迫ることが可能になると考えている。

②信州伊那地域の村社会の特性把握

座光寺村の全体構造把握に至らなかったため、伊那地域の村社会の特性把握も課題として残されることになった。しかし、近世中後期の村社会の共同性が、地縁と同族関係との絡みあいの中で成立していた点を具体的に抽出できたことは大きい。この成果に基づき、現在は清内路村における共同性の分析に取り組んでいる。また、下川路村と天竜川との関係についても検討を行い（羽田真也「宝暦～明和期の天竜川両岸村々と村落間関係」『飯田市歴史研究所年報』19 号、2021 年 10 月刊行予定）、下川路村の社会構造を解明するための手がかりを獲得しつつある。さらに、播州加古郡新野辺村の社会構造分析も行い（羽田真也「水利秩序から地域社会を考える　―近世播州加古川下流域を素材に―」『歴史科学』230 号、2017 年、39－55 頁）、伊那地域と比較する素材も得られた。これらを通して、伊那地域の村社会の特性が浮き彫りになると予想される。

（６）地元・座光寺との協働、研究成果の還元

（１）で触れたように、現状記録調査は可能な限り「歴史に学び地域をたずねる会」と協働で実施した。同時に、「歴史に学び地域をたずねる会」での報告会や地域史講座を開催し、調査や研究の成果を地域市民へ還元した。

なお、研究期間中の成果を総括するため、2020 年度（令和元年度）末に、他地域の山里の社会構造分析を進める研究者を招聘し、座光寺でワークショップを行う予定であったが、新型コロナウィルス感染症流行により開催を断念した。その代替として、2021 年度（令和 2 年度）に、「歴史に学び地域をたずねる会」において研究成果を 5 回に分けて報告する機会を設けた。

これらの活動により、史料の存在意義を周知するとともに、現在、座光寺で取り組まれている歴史文化を基盤としたまちづくり運動に寄与することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 羽田真也	４．巻 19
２．論文標題 宝暦～天明期の天竜川両岸村々と村落間関係	５．発行年 2021年
３．雑誌名 飯田市歴史研究所年報	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 羽田真也	４．巻 18
２．論文標題 近世座光寺村の組と家	５．発行年 2020年
３．雑誌名 飯田市歴史研究所年報	６．最初と最後の頁 86-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 羽田真也	４．巻 －
２．論文標題 べか車の車主と車力	５．発行年 2019年
３．雑誌名 塚田孝編『シリーズ三都　大坂巻』	６．最初と最後の頁 111-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 羽田真也	４．巻 17
２．論文標題 18世紀の天竜川をめぐる争い―旧川路村役場文書より	５．発行年 2019年
３．雑誌名 飯田市歴史研究所年報	６．最初と最後の頁 102-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 羽田真也	4．巻 239
2．論文標題 書評　三田智子『近世身分社会の村落構造』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史科学	6．最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 羽田真也	4．巻 －
2．論文標題 出開帳を請け負う人びと－信州伊那郡座光寺村如来寺の事例から－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 塚田孝ほか編『三都科研報告書　日本近世の都市社会と史料』	6．最初と最後の頁 162-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 羽田真也	4．巻 16
2．論文標題 一七世紀の市田郷の山　－延宝六年の山論文書より	5．発行年 2019年
3．雑誌名 飯田市歴史研究所年報	6．最初と最後の頁 124－131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 羽田真也	4．巻 230
2．論文標題 水利秩序から地域社会を考える－近世播州加古川流域を素材に－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 歴史科学	6．最初と最後の頁 39‐55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 羽田真也	4．巻 27
2．論文標題 元禄四年の寺社改と村の寺	5．発行年 2017年
3．雑誌名 和泉市史紀要	6．最初と最後の頁 28‐51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 羽田真也
2．発表標題 天竜川をめぐる近世的秩序の確立
3．学会等名 飯田市歴史研究所定例研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 羽田真也
2．発表標題 17世紀の信州伊那郡座光寺村における山の用益
3．学会等名 第12回「山里の地域史」研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 羽田真也
2．発表標題 17世紀の伊那郡市田郷における山の用益
3．学会等名 第4回山里科研研究会
4．発表年 2021年

１．発表者名 羽田真也
２．発表標題 近世座光寺村如来寺の出開帳と請負人
３．学会等名 飯田市歴史研究所定例研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 羽田真也
２．発表標題 信州伊那郡座光寺村の組について
３．学会等名 大阪近世史の会
４．発表年 2018年

１．発表者名 羽田真也
２．発表標題 近世座光寺村の組について
３．学会等名 飯田市歴史研究所定例研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 羽田真也
２．発表標題 書評　三田智子『近世身分社会の村落構造』
３．学会等名 近世史の会書評ワークショップ
４．発表年 2019年

１．発表者名 羽田真也
２．発表標題 信州伊那郡座光寺村の社会構造―文化期の村方騒動を手がかりに―
３．学会等名 関西学院大学近世史研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 羽田真也
２．発表標題 近世の郷蔵普請について―座光寺村の事例から―
３．学会等名 飯田市歴史研究所ワークショップ
４．発表年 2017年

１．発表者名 羽田真也
２．発表標題 近世座光寺村の社会構造―文化期の村方騒動を手がかりに―
３．学会等名 飯田市歴史研究所定例研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 飯田市歴史研究所	４．発行年 2021年
２．出版社 飯田市歴史研究所	５．総ページ数 84
３．書名 川路のあゆみ　近世から近代へ（うち羽田真也「親田村の山と下川路村」（10-15ページ）・同「天竜川をめぐる村々の争い」（16-21ページ））	

１．著者名 和泉市史編さん委員会	４．発行年 2018年
２．出版社 和泉市	５．総ページ数 544
３．書名 和泉市の近世（うち羽田真也「延宝検地と山・寺社」（253‐266ページ）・同「元禄四年の寺社改めと寺院・村」（267‐288ページ））	

１．著者名 飯田歴史研究所	４．発行年 2019年
２．出版社 飯田市教育委員会	５．総ページ数 205
３．書名 飯田・下伊那の歴史と景観（うち羽田真也「江戸時代の座光寺と川原の開発」（68‐69ページ）・同「江戸時代の下川路村と治水」（136‐137ページ））	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関